

子供とのふれあい



大 竹 磯 夫

四月四日、子供たちは進級の喜びと希望で胸をふくらませながら登校してきている。

「先生、先生」と呼ぶ子供たちの声。三年一組の大竹先生は女の先生、男の先生、どっち、どちらなの、教えて。」と、にぎやかな明るい声にまじって聞こえてくる。

新学期はどこにでも見られる光景だが、私にとっては、今年の四月転動した学校、この子供たちと始めての出会いである。子供たちはどれほど新しい先生を待っていたか想像できる。

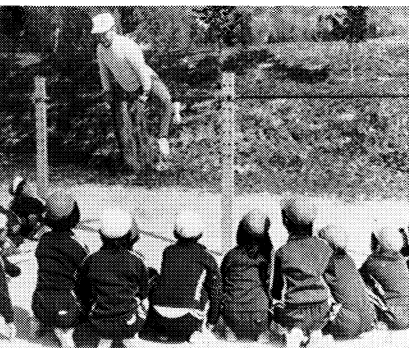
そんなとき、私たち教師は決意をあらたにし、「よし、あの子供たちのためにしっかりとやらなければ。」と考える。また、この子供たちの喜びと期待を裏切らないよう、ありったけの力を振り

しぼり、時間と力のある限り誠心誠意努力しようと思う心は、私だけではな

四月六日……出会いの三日目、私は「みんな、体育やりたいか。」というが早いか、いつせいに手をたたくて喜んだ。気のはやい子は立って歩き始める。肩をたたきあって喜ぶ子、握手しながらとびあがってはしゃぐ子、今までの緊張していた一人一人の顔は、いっぺんに消えてしまった。

「ようし、じゃ、並んで鉄棒の所に集まれ。」といい、私も急いで体育の服装に着替え、鉄棒の所に走った。「みんなね、今まで勉強した鉄棒をやつてごらん。」と、いって順々にさせてみた。「ようし、今度は先生の番だ。」といって小学校にある教材の運動をかたづけしから

やってみせた。「これはおまけ。」といって、ももかけあがり、ともえ、けあがりもやってみせた。子供たちはため息の連続、「すごいなあ。」といいながら、あせんとしている。「みんなは三年生だから、これをやっておぼえなさい。」と、いって学習する運動を知らせてやった。今度はとび箱、次はマットと、次々に学習内容の運動をひろうした。



ようし、今度は先生の番だ

日、今ではお互いに助け合い、励まし合い、磨き合おうとする姿に変わってきている。また、からだは鍛えようによって変わるものだということも実感として知ったようである。ふれ合いということだが、ここには生きていくようであった。

技術の向上にいとむ子供たちを見ながら、客観的には厳しい学習であつても、主体的に学習が展開されているときには、緊張のなかにゆとりがあり、しかも充実感を覚えるものである。また、こうした厳しさのなかでこそ、ほんとうのふれ合いがあり、真の人間的深まりができていくのだと思う。このふれ合いの美しさはきつと教室の中、生活の中にも大きく広がっていくことと信じている。

(田島町立荒海小学校教諭)